

# 旧水路研究ノート

## 六間堀はいつ誕生したか —検証・万治開削説—

### 旧水路ラボ

#### 一・六間堀とは

墨田区には隅田川を初め、多くの水辺がありますが、かつてはもつとたくさんの川や堀があり、数百年もの間、重要なインフラとして人々の暮らしを支えていました。

六間堀もその一つで、墨田区の南から江東区へと流れた、幅一一メートルほどの水路です。堀及びその周辺は、松尾芭蕉や尾形乾山、伊東深水等のゆかりの地として知られ、江戸前寿司発祥の地の一つでもあります。ただ、残念ながら、六間堀そのものの知名度は高くなく、研究も進んでいないため、誕生から終焉に至るまで、謎多き水路になっています。本稿では、そういった謎を解明する第一歩として、六間堀の誕生時期に関する從来の説を検討し、問題点を探ってみたいと思います。

#### 二・万治開削説

六間堀の成立については、万治年間（一六六〇年前後）の本所開発で開削されたとよく言われます。『墨田区史』や『墨田誌考』の他、『御府内備考』や『葛

西志』といった文政期（一八二〇年前後）の幕府関係の文献でもこの説が採用されており、長年、通説的地位を保ってきたようです。

#### 三・万治説に対する疑問

しかし、万治開削説には、いくつもの疑問点があります。

(二) 分郷六間堀 『町方書上』の深川海辺大工町の項によれば、慶長元（一五六九年）に深川村分郷六間堀が成立しています。これに従うなら、本所開発の六〇年以上前から「六間堀」という名が存在していたことになり、万治説とは矛盾しそうです。



#### (三) 周辺の道

寛文五枚図を見ると、堀の南側に、蛇行した道が確認できます。本所北部の区割からも分かるように、本所開発の時点では既に存在していた集落は、区画整理が行われず、不規則な街区のままにされました。六間堀南部も古くから村落があります。このような場所に堀を通すとは考えにくいですが、もし村落を貫く形で堀を開削したのなら、元からあつた東西方向の道は堀によつて分断されたはずです。しかし、そういった道は見当たりません。

このように、万治説には不可解な点が

(二) 堀の形状 本所開発では、豊川や横川等が造られましたが、それらは街路に合わせて直流

しています。しかし、六間堀は、隅田川に沿うように曲流しており、計画的に造成されたにしては不自然な流路になっています。

#### 四・『本所深川起立』の解釈

さらに、万治説の論拠となっている『本所深川起立』の記述も、実はすつきりしない書きぶりになっています。すな

わち、「豊川を上口二十間敷十四間深さ

一丈四尺ニ掘立其後横川十間川六間堀をも右深さに準じ掘」という記述は、確かに、豊川と同時期に開削されたとも読めますが、元からあつた水路を一丈四尺まで掘つただけとも読める書き方なのです。横川や十間川も、元々その辺りに自然河川があつたと言われています。しかし、その辺りに自然河川があつたと言われていることを踏まえれば、後者の読み方も十分成り立つように思います。

#### 五・まとめ

以上から、六間堀の誕生は万治年間よりも遡る可能性が高いと考えられます。具体的にいつ、どのようにして誕生したのかについては、紙幅が尽きましたので、稿を改めて論じることにします。

多く、むしろ、もつと前から六間堀は存在していたと考え方が合理的です。